言葉のゆかいさ、おもしろさ

若月和子

驚く心は、保育のスタート

保育の中で、子どもの言動に「おっ！　そう思ったの！」と驚くことがよくあります。次には「すごい！」と感激や感動する心がやってきます。特に、子どもたちのゆかいな、おかしな言葉を拾い記録することは、「仕事が楽しい！」と思う場面の一つです。驚く心をもって、保育は日々始まります。

一方、保育室は狭く、環境整備や生活を進めるために悪戦苦闘している保育園の現状では、保育を運営するための「真剣勝負」も多くあります。余裕がないことも少なくありません。自分の思うような保育をしているのか、いや、でもこの状況下ではこれ以外にやりようがない、そんな毎日です。こうした余裕のない時には、子どもたちへの驚きが、自分への失望や疑問の心になるのも確かです。倉橋が言うような「美しい殻[注]」になる余裕さえないのが現状です。しかし、保育とは、どんな時にも子どもたちの

成長と共に形を変えて展開するものであり、私はその中にいる自分を発見し、保育を楽しんでいます。そして、「私たちは人間同士だ」と熱く思うのですが、それは大げさなことでしょうか。

二歳児クラスの流行語

子どもの育ちを継続的にとらえる保育実践ができるように、二歳児クラスでは三人の担任が、「リズム」「製作」「ことば」の分野をそれぞれが分担して実践しています。私は「ことば」を担当しているのですが、記録をとりながら、二歳児クラスの子どもの言葉に対する興味や、子ども同士でコミュニケーションをとろうとする姿のゆかいさ、おもしろさを実感しています。

年間の保育反省に入れた、①流行語大賞、②言葉で遊ぶ、③手遊び、④家庭からの反応、の中から、その一部を以下に紹介していきます。

流行語大賞

（　）内は子どもの気持ちと解説

四月「ママお仕事、パパ会社」
（泣かないで待っていればママはお迎えにくるよ）

五月「ばかって言ったら、自分がばかだよ」
（ばかって悪い言葉だよ）

六月「大事！　大事！」
（先生の物にさわっちゃだめだよ）

七月「怒ってる？」「怒ってない！」
（怒ることはいけないことだから、聞かれると「怒ってない」と必ず答える）

八・九月「おおまちがいのとんちんかん」
（ダメと言われるよりダメージが弱く、非を認めることができる）

十月「ばか女、カバの結婚まだ早い」
（出所は不明。他愛もない言葉遊びなのでしょ

うが大人からするとちょっと困ったものも多いのです）

十一月「ママ（迎えに）来ない！」

（おまえは悪い子だから、ママはお迎えに来ないよ）

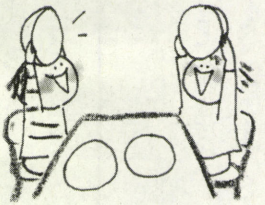
右記はおおまかですが、月ごとに子どもたちの中でよく使われた言葉です。その時々の子どもたちの気持ちにぴったりで、「流行語大賞」としてクラス便りに載せたり保護者に紹介したりしてきました。

四月は新クラスになって、担任も一部替わり、新入園児も進級児も奮闘しています。登園時に泣いている新入園児に、「ママはお仕事でパパは会社に行っているから自分たちは保育園で遊んでいるの。だから泣かないのよ」という気持ちを進級児が話しています。これは進級児の気持ちの表れでもあるのですが、担任が言うのとは違い、友達が話すのを聞いて新入園児もそれを「ああそうなのか」という顔で聞いています。おもしろいと思うのは、「ママはお仕事」で「パパは会社」でなくてはいけないことです。ちょっとふざけて「ママ会社、パパ仕事」と横から私が言ってみると、「違う！」と厳しい顔で否定されました。会社と仕事のイメージが違うのかもしれません。

そのほかには、「これはいけないんだよね」と思う子どもの気持ちが多く表れ、担任も「そうだね、そのとおり」ということで、「大事！　大事！」や「おおまちがいのとんちんかん」などの言葉を使ってきましたが、最近は友達に対して大きなダメージを与える「ママ来ない！」が飛び交っています。けんかやトラブルが起きた時に、おまえはいい子じゃないからママは迎えに来ないのだという意味の言葉を発することで、トラブルがエスカレートしてしまいます。

二歳児クラスの子どもにとってママは絶対的な存在ですから、言われたほうは躍起になって「ママ来る！」と反発し収拾がつきません。けんかの両成敗を避けて「パパが来るんじゃない？」と言ってみましたが、案の定、効果なしでした。こんなに日本のパパの存在は薄いのか……と思いもしますが、ともかく、ひっかきや、かみつきになる恐れもあるし、この辺で風向きを変えたいと考えます。室内電話を使って「○○さんですか？　お仕事中ごめんなさいね。今日ママお迎えに来ないってほんとですか？　えっ、お迎え来る？　みんな、お迎えに来るんだって！」とお茶を濁してみました。が、もちろん、これは根本的な解決にはなりません。両者ともムッとした顔つきをしていて火種が残っているのがわかります。根は深い。担任ごときの力の及ばないすごさを感じる場面です。

また、私は言葉の力を借りて生活をスムーズに楽しくしたいとも考えています。いま、ひそかに流行させたいと思っているのは「ピッカピカ」です。というのは、クラスの子どもたちの食事量が少なく、家庭では自分で食べずに口に入れてもらっている子どもが約半数もいることについて、何とかしたいと思ってのことです。二歳児クラスの残飯は多く、「鶏や家畜を飼って食べてもらいたい」「もったいない」と思うことが少なくありません。そして何より、子どもたちにとって食事が楽しい時間であってほしいのです。そこで、量を減らし介助もしますが、自分からお皿をきれいにすることを目標にできないだろうか、と考えました。個人の適量を把握することは結構難しく、減らし過ぎて「疑問！」と他クラスの職員から言われたりもします。でも、空になった自分のお皿を持ち上げて「見て、ピッカピカ！」という声が飛び交うようになるのを見て、〝これだ！〟と思いました。「ピッカピカ」と言いながら、「きれい



なお茶わんになったね」「洗ったみたいね」「嫌いなものでも少しは食べたね」と担任に認められ、自信をもった子どもの声になっていくといいなと思っているところで、今後に期待をしています。

ただし、同時に、その声がまたにぎやかであり、「いいから食器を置いといて。みんなで言うと、うるさいわね」とも思ったりしています。

言葉で遊ぶ

食事時間に子どもの「いただきます」に対して「どうぞ召し上がれんちゃん」と言葉の最後に名前を加えて応えると、本人は、「違う！」と不快感をあらわにしています。小さい声でも聞き耳を立てているようで、「どうぞ召し上がれ」と言うと、目をパチパチさせて安心した様子です。しりとり的な楽しさを感じてもらえるかと思い、今度は「どうぞ召し上がれんこん」と言ってみると、やはり納得しない顔つきです。

きまじめな二歳児の特徴が出ているように思いますが、三歳になった子どもにはこのジョークが通じてニヤニヤして聞いています。自ら「召し上がけんちゃん」と言ったり、仲良しの鈴木裕香（仮名）ちゃんと杉本亮（仮名）ちゃんの名前を取り替えて、「鈴木亮ちゃん」と言うとニヤニヤして楽しむことができるのです。

また、はさみ使いの上手な子に「上手！　うまい！　おいしい！」と言うと、二歳児は「違う！（まったく先生は本当にしょうがない）」と不快感をあらわにしますが、三歳の子どもは、「また先生の冗談が始まったよ」とニヤニヤするのです。

手遊びにしても、「トントントンネルくぐった

ら、アリがアリがカニになった」を「ミミがミミがゆうちゃんになった」と、家庭では自分と友達の名前に替えて歌い、楽しんでいると報告されたりもしています。また、給食が大好きな子どもが自ら「京浜東北線の大森〔大盛り〕にしてください」と言うのは、上級のジョークではないでしょうか。こんな時は、「共感」とひと言では言い切れないほどの子どもとの「仲間意識」を私が感じさせられる瞬間で、子どもと肩を組みたくなるほどうれしくなるのです。

家庭からの反応

「子どもの言葉を聞いて驚きました」と、保護者から伝えられることがよくあります。

・母親がリンゴの皮をむいていて「失敗しちゃった」と言うと、「失敗は成功のもと」と言う。

・おしゃべりなママに対して「ママうるさい、ちょっとあっちへ行っててよ」と言う。

・返事をする時、「OK！」とか「了解！」と言う。

・嫌なことや間違ったことをすると、「今度やんないでね」と言う。

・「しつっこい！　もうおしまい！」と言う。

・「お先に失礼！」と言って、走って逃げる。

しかも、これらの言葉は、どうやらどれも私の言葉らしいのです。らしいではなく、不用意に使っている言葉も多く、反省することしきりです。イントネーションや口調がきっとそっくりなのでしょう。先日も、保護者の方とその話をしていて、「ごめんなさいね、お国（中国）の言葉ではなく、津軽弁を教えちゃったかしら？」と笑い合いました。

それにしても、言葉の使い方に対する二～三歳児のセンスやキャッチする力には、驚ろ木、桃の木、山椒の木（？）。とても感心させられる毎日です。

（東京都公立保育園）

注　詳しくは本誌p.8『驚く心』引用文参照